

田中家通信

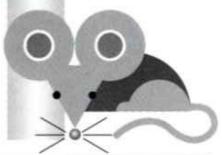
発行
田中家石材
彦根市高宮町108-1
Tel.0749-24-2789
VOL.12



覚えておきたい語源・由来
振袖

明けまして
おめでとう
ございます。

お正月の仏教行事 修正会



修正会とは「正月に修める法会」のことです。また、修正は「翻邪修正（誤った行いを改め、正し行いをすること）」の意味もあるといわれています。

修正会は宗派を問わず行われ、世界の平和、人類の幸福、佛教の興隆などを祈ります。

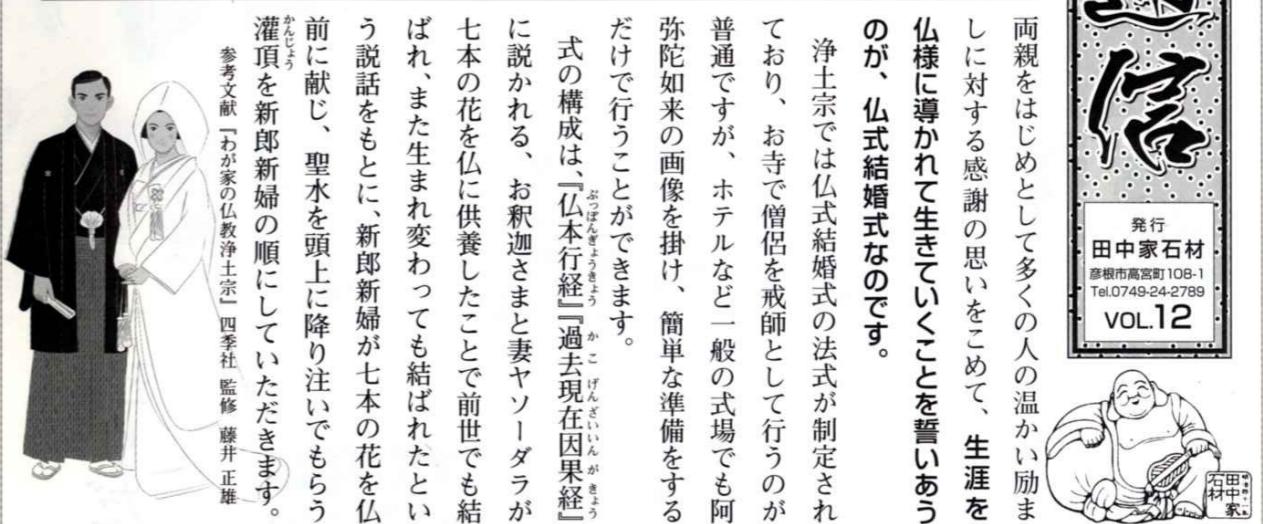
仏式結婚式

仏式結婚式とは、本尊の前で新郎新婦が生涯にわたる固い契りを誓い合う儀式です。佛教の考え方からみれば、一人の男女がこの世で夫婦になるということは偶然ではありません。過去世から因縁づけられていて、その因縁が熟してめでたく結ばれたのです。そうした深い縁を感じるとともに、

田中家通信 編集部より

阪急グループの祖、小林一三に挿話がある。不況の底にあつた昭和の初め、経営する百貨店の食堂では客がご飯だけを注文し、卓上のソースをかけて食べる光景が見られた。無料のソースばかりを減らす客に閉口してか、食堂の扉に「ライスだけの客お断り」と張り紙が出た。読んだ小林は書き直させたという。「ライスだけの客歓迎」ご飯だけの客が阪急びいきの上客になつていく。損は儲けの始めなり、だろう。目先のそろばんをはじく「頭」はあっても、客の身を思いやる「胸」のない経営者には真似できません。(以下省略)

この記事は、読売新聞の「編集手帳」より抜粋いたしました。最近の経営者の倫理欠如には、近江商人のいう「正直、堅実、



説かれる、お釈迦さまと妻ヤソーダラが七本の花を仏に供養したことと前世でも結ばれ、また生まれ変わつても結ばれたといふ説話をもとに、新郎新婦が七本の花を仏前に献じ、聖水を頭上に降り注いでもらう灌頂を新郎新婦の順にしていただきます。

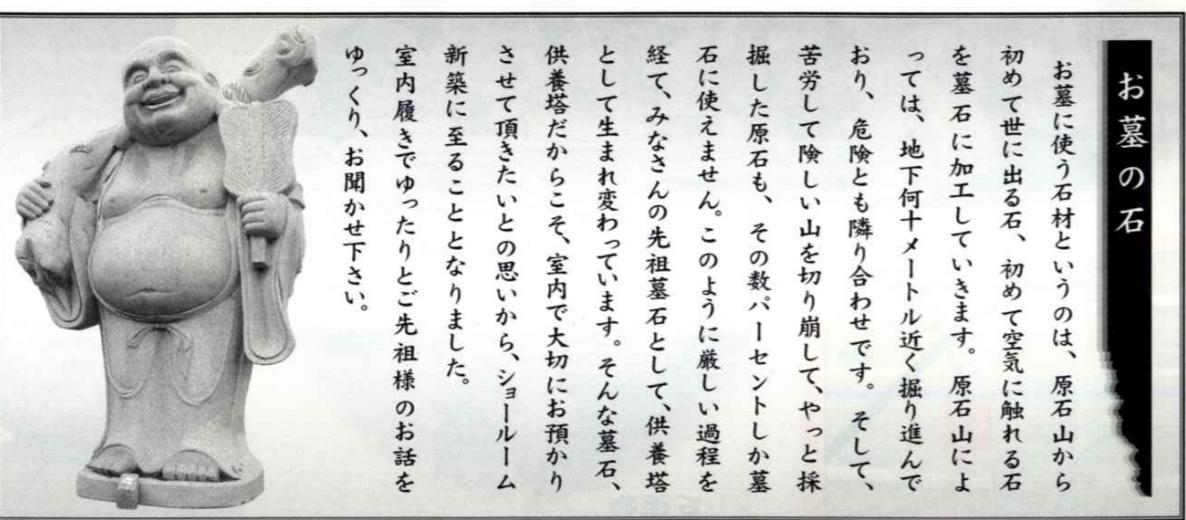
参考文献「わが家の仏教浄土宗」四季社 監修 藤井正雄

両親をはじめとして多くの人の温かい励ましに対する感謝の思いをこめて、生涯を仏様に導かれて生きていることを誓いあうのが、仏式結婚式なのです。

浄土宗では仏式結婚式の法式が制定されおり、お寺で僧侶を戒師として行うのが普通ですが、ホテルなど一般の式場でも阿弥陀如来の画像を掛け、簡単な準備をするだけで行うことができます。

式の構成は、「仏本行經」「過去現在因果經」に説かれる、お釈迦さまと妻ヤソーダラが七本の花を仏に供養したことと前世でも結ばれ、また生まれ変わつても結ばれたといふ説話をもとに、新郎新婦が七本の花を仏前に献じ、聖水を頭上に降り注いでもらう灌頂を新郎新婦の順にしていただきます。

袖を振ると愛情を示す、袖に縋る「すがる」と哀れみを請う、などといったもので、それを未婚の娘達が真似をして大流行したたまり、振袖は未婚女性の着物という習慣が出来上がったと言われます。また、袖を振るという仕草から、厄払い・清めの儀式に通じるとも考えられています。結婚式や成人の日などに振袖を着用するのは、人生の門出に身を清めるという意味を持つようです。このように昔から振袖は人との縁・魂を呼び寄せ、厄払い・お清めに通じると考えられていました。



お墓の石

お墓に使う石材というのは、原石山から初めて世に出る石、初めて空気に触れる石を墓石に加工していきます。原石山については、地下何十メートル近く掘り進んでおり、危険とも隣り合わせです。そして、苦労して険しい山を切り崩して、やっと採掘した原石も、その数パーセントしか墓石に使えません。このように厳しい過程を経て、みなさんの先祖墓石として、供養塔として生まれ変わっています。そんな墓石、供養塔だからこそ、室内で大切にお預かりさせて頂きたいとの思いから、ショールーム新築に至ることとなりました。

室内履きでゆつたりとご先祖様のお話をゆっくり、お聞かせ下さい。

この四点が近江商人の経営活動を支えていたバックボーンだと思います。それによって得た財産を近江商人は、「陰徳善根」に使いました。「陰徳善根」とは、「見返り」を期待しない「喜捨」の精神、喜んでささげる心で寄付、社会事業を行うという、いかえれば感謝報恩奉仕の心です。

振袖とは袖の長い着物のことと言い、未婚女性が着用する最も格式高い着物です。袖丈の長さにより大振袖・中振袖・小振袖の三種類に分けられます。

振袖が今のように未婚女性の着物となつた事のひとつに、江戸初期（約400年前）の踊り子の風俗が上げられます。これは、袖を振ると愛情を示す、袖に縋る「すがる」と哀れみを請う、などといったもので、それを未婚の娘達が真似をして大流行したたまり、振袖は未婚女性の着物という習慣が出来上がったと言われます。また、袖を振る

という仕草から、厄払い・清めの儀式に通じるとも考えられています。結婚式や成人の日などに振袖を着用するのは、人生の門出に身を清めるという意味を持つようです。このように昔から振袖は人との縁・魂を呼び寄せ、厄払い・お清めに通じると考えられていました。